

## 京都府下近年出土の鏡に就いて (2)

樋口隆康

京都府は古鏡の宝庫といってもいい。前回の論集に説明した以後、新たに出土したものについて、説明することにする。特に優れた鏡というものは無かったが、一点一点では注目すべきもの、卑弥呼の鏡に関わるものなどがあって、目が離せないといった感じである。

### 1. 双頭龍文鏡(図版第12-(1)) 径12.3cm

船井郡園部町黒田古墳出土

素文の平縁との間に幅広の溝圈帯を界とした内区は、鈕の両側に真直ぐのびる銘帯によって、2つの半円径に二分され、各々にS状の銅部の両側に龍頭をつけた、いわゆる双頭龍文をおいている。龍文の外周半円には連弧文を並べている。銘は、「位至三公」と「君宜高官」の4字句二組を鈕の両側に配置させている。

この鏡の図文に最も似た例は、羅振玉『古鏡図録』下9の鏡である。この鏡ではS字状の両端の龍頭がはっきりしており、1頭は、単角をもち、他頭は双つの肉耳をつけている。本鏡は、単角は認められるが龍の首がやや便化している。

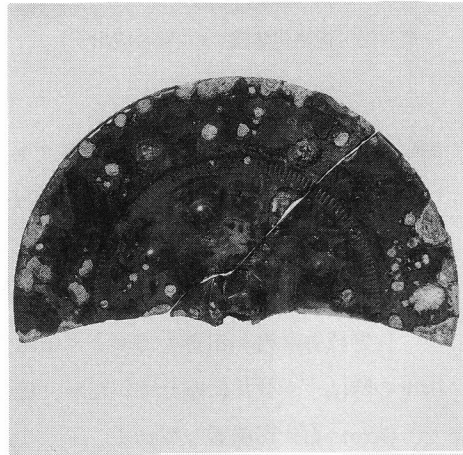
類似の鏡が、洛陽焼溝M120墓から出土している。(『洛陽焼溝漢墓』図版45の4)この墓は後漢初・中期に当るとされており、鏡の製作もその頃にあてられよう。

### 2. 方格規矩渦文鏡 径11.2cm

福知山市天田寺ノ段<sup>2</sup>号墳出土

半欠のうえ、著しく磨滅しているが、図文はなんとか判別できる。

小円鈕をめぐる方格があり、その外方にT・L・Vと円乳との間にC字形渦文を散らしている。内区の端に櫛目文帯があり、外区は鋸歯文帯と波文帯が一円圈によって画されている。



第1図 方格規矩渦文鏡(寺ノ段2号墳出土)



第2図 方格規矩渦文鏡(黒川古文化研究所蔵)



第3図 方格規矩鏡(ヒル塚古墳出土)

これと似た図文の鏡は、京都大学考古学研究室蔵鏡(No. 1196、径12cm)や、黒川古文化研究所蔵鏡(径10.46cm)などがある。

もとの割れ口は磨耗して鋭利さを失っているので、半欠のまま垂飾として転用されたかもしれない。

### 3. 方格規矩鏡 径14.4cm

八幡市美濃山<sup>3</sup>ヒル塚古墳出土

方格規矩鏡としては、小型で、文様も特異である。

方格の内の鈕座の四葉文は、蕾のような形をしている。方格内には12個の小乳があるが、十二支の銘はない。

方格の外では、各辺中央のT字形のみで、L形V形はない。T字形の両側にある八個の乳は、壁形の座をしている。方格の四角の部分には乳座から小禽の上半身が飛出して、隣りの小禽と向い合っている。T字形の外方にも側向きの小禽が1羽づつおかれている。

外区は二つの鋸歯文帯の間に、一つの複波文帯がある形式である。

同じ古墳からも1面小破片が出土しており、獣の一部と「人民」「節」の銘字がのこっている。恐らく、「四夷服」式の銘を持った、画像鏡か、獣帯鏡ではないかと思われる。

### 4. 画文帯環状乳神獸鏡(図版第12-(2)) 径14.8cm

竹野郡弥栄町和田野大田南<sup>4</sup>2号墳出土

出土の時は、十数片に割れていたが、接合すると、ほぼ完形に復元できた。鋳上がりはよく、僅かに布片が癒着している。

内区の主文は三組の騎獣神像を、右旋りに配したものである。したがって、この類の鏡

の標識である環状乳は、6個である。獣の背に乗っている神仙像は、頭形が違う。一つは双髻形で西王母、二つ目は三山冠をかぶっており、東王父と比定される。もう1体は、蕨手風の飾をつけており、膝上の琴ははっきりしないが、腕まくりをしているようなので、白牙彈琴の像であろう。環状乳の上には鳥形が一つづつおかれている。

半円方形帯の方形内には各4字の銘があるが、「吾」「日月」「幽三」など数語がよめるだけである。

外区は、画文帯と渦文帯からなっている。画文帯は6匹の龍にひかれる雲車(又は舟)と、捧日の神仙、騎獣の神仙、などがあるが、捧月の神仙像を欠いている。

本鏡で最も特徴とするのは、鈕に肉彫りの図文があることで、双頭龍文の帯状の銅の中心が鈕の頂心であり、胴が巴文風に転回して、両端の龍頭部が鈕の紐通の孔にあたっているようである。

鈕に龍文を彫刻している例は十数例あり、獣面を肉彫りした熹平二年獸首鏡や、龍の側面形を線刻した鍍金画文帯対置式神獸鏡(鄂95, 96)など数型式に分けられるが、本例に最も近いのは、湖北省鄂城出土銘帯画文帯神獸鏡(鄂46)、安徽省霍邱県張家崗龍台古墓出土夔鳳鏡(文物58の1)、楽浪郡出土夔鳳鏡(樋口127)などである。後漢末の作であろう。

## 5. 景初四年盤龍鏡 径16.8cm

福知山市天田広峯<sup>5</sup>15号墳出土

主文は鈕から放出した4頭の龍の上半身が、両頭つつ向き合っている。胴部は各動物共に鱗で飾っているので、4頭共龍の属であろう。一組は双角と単角の龍、他の一組は共に無角である。

主文帯の外に、銘文がある。

「景初四年五月丙午之日、陳是作竟吏人  
詔之位至三公、母人詔之保子宜孫、壽如金  
石兮」

外区は鋸齒文帯と複線波文帯の二圏からなり、縁は軽く立ち上がった斜縁である。

これの同型鏡が西宮市の辰馬考古資料館にある。

この鏡の主文は、三角縁盤龍鏡と京都府相楽郡椿井大塚山古墳出土鏡(M36)などと極めて近いが、後者は径23cm以上の大型



第4図 景初四年盤龍鏡(広峯15号墳出土)

鏡である。銘文もまた、景初三年三角縁神獸鏡と酷似している。したがって、本鏡は三角縁神獸鏡のうち陳是が作った鏡と同じ作者であると思われる。

景初四年という紀年については問題がある。即ち、景初は三年までで、次の年は正始と年号が変わった。しかるに本鏡には景初四年の年号が使われているのである。

『三国志・魏書』によれば、明帝は景初三年正月丁亥朔に薨じ、齊王芳が帝位に即位したが、漢代以来の慣例に従ってその年は改元せず十二月まで来たが、翌年正月は先明帝の忌日に当るので、改元するのに不適當と判断し、景初四年(A. D. 240)正月に当る月を三年の後十二月とし、次の月を正始元年正月とした。

そもそも、当時の曆には三統とか三正とって3種あり、寅の月を正月とする夏正と、丑の月を正月とする殷正と、子の月を正月とする周正とである。魏は本来建寅の月の夏正を採っていたが、明帝が青龍五年(A. D. 237)三月に黄龍があらわれたので改元して、建丑の月の殷正に変えて、景初元年四月とした。したがって齊王芳の改元は、元の夏正にもどったわけである。

したがって、景初四年という年は、実際には存在しないのであるが、その年号が一部で使われていたことも、事実である。平成元年になっても、昭和64年と記録した文書が実際に通用していた事実を我々は体験している。したがって、何らかの理由で改正前の年号が、改正後の鏡銘に使われていたことを認めざるを得ないのである。

陳是作の鏡としては、魏の紀年をもつ同向式神獸鏡が5面、盤龍鏡が2面ある。ところが、陳世作の鏡として、呉の紀年をもつものに、重列式神獸鏡5面、対置式神獸鏡2面がある。したがって、陳氏は魏の鏡も、呉の鏡もつくった工人である。即ち三国時代当時の鏡師は、特定な一国に附属したものではなかったと思われる。

## 6. 龍虎鏡(図版第13-(1)) 径11.5cm

福知山市石原ヌクモ<sup>6</sup>2号墳出土

小型の盤龍鏡である。鈕の両側に龍虎の2獣が体をS字状にくねらせてめぐっているが、各胴の中央部が鈕の下にかくれており、頭と前脚が前に、尻と後脚が後に展開している。盤龍鏡としては珍しいデザインである。岐阜県可児郡御嵩町赤坂古墳出土鏡(岐阜県史892)などはこれに近いが、2獣が長条形の龍形をしている点が少し異なる。内区の外周には櫛目文帯、外区には鋸歯文帯と波文帯がめぐっている。縁は斜縁に近いが、丸みがある。魏晋時代の作。

7. 四獣形鏡 径12cm

7  
城陽市久世芝ヶ原12号墳出土

仿製鏡としては、比較的鑄上がりの良い鏡で、角が丸みのある斜縁、二つの鋸歯文帯と、その間の複波文帯からなる外区文様は中国鏡のスタイルを残しているが、外区が薄いのは日本的である。

内区の主文は、四乳の間に同じタイプの獣形を配している。獣といっても、4足もない便化著しいナメクジ形で、頭部をC字形の胴内に強く曲げ、尻尾は細い線となつて、波形に乳の下までのびている。

地には方向の交叉する疎い線影文でうめられている。その線影文の所々に線描きの図形らしきものがあり、小さな禽獣文を描いていたかもしれない。

城陽市西山2号墳や、宇治丸山古墳など、近くから出土した鏡と共通した趣があるのは興味深い。



第5図 四獣形鏡(芝ヶ原12号墳出土)

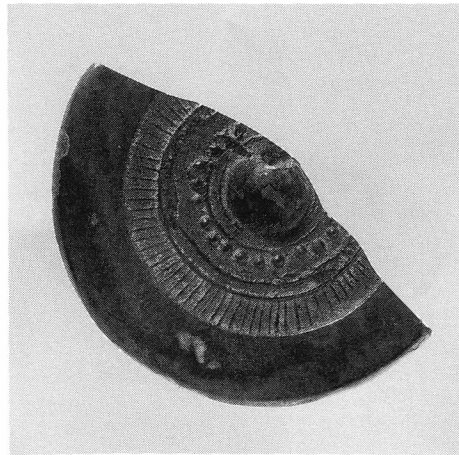


第6図 珠文鏡(志高遺跡出土)

8. 珠文鏡 径6cm

8  
舞鶴市志高舟戸志高遺跡出土

鈕を欠失しているが、小型の薄い仿製鏡である。鈕をめぐる一圈の連珠文帯があり、その外周に、鋸歯文帯、二重圏、楯目文帯の順に配されている。この種の小型の珠文鏡が古墳時代初頭の布留式文化層から出土しているが、このタイプの再検討を要求する資料が増えつつある。



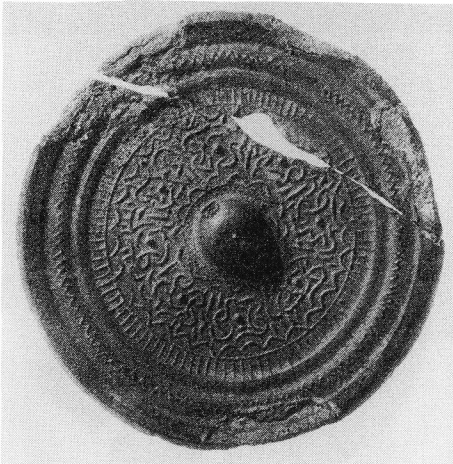
第7図 珠文鏡(馬場遺跡出土)

9. 珠文鏡 径7cm

長岡京市馬場遺跡<sup>9</sup>(庄内式期)出土

半欠であるが、鈕をめぐって一列の珠文帯があり、その外柵目文帯があつて、素文の外区になっている。光滑、良質であるが、珠文の配列は不規則だし、圏線が乱れているところもある。

似た図文の鏡としては、高槻市岡本弁天山B4号墳出土鏡(『弁天山古墳群の調査』図版B27)、兵庫県佐用町円応寺古墳出土鏡、城陽市上大谷13号墳出土鏡、香川県綾歌郡飯山町東元三池やくし古墳出土鏡、佐賀県久保泉町関行丸古墳出土鏡、福岡市西区鋤崎古墳出土鏡等々がある。



第8図 簡易鳥獸文鏡(鄂城鋼五四四工地第45号墓出土)

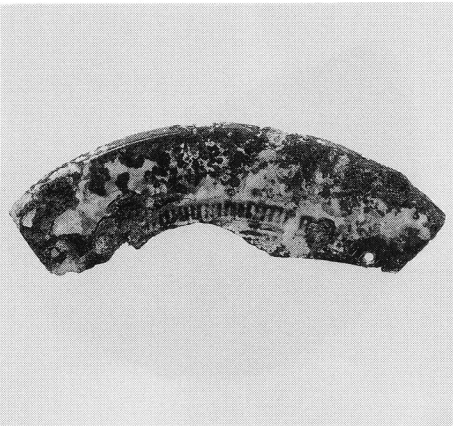
この種の小型の珠文鏡は古墳から出土するとみられていたが、最近では古墳初期の庄内式期、布留式期の資料が増えつつある。金沢市下安原サンデン遺跡では、集落の構内からでている。

10. 獸首形鏡(図版第13-(2)) 径11.8cm

相楽郡木津町市坂瓦谷古墳<sup>10</sup>出土

内区は4乳の間に、太い突線描きで渦文風の文様をあらわしているが、獸首鏡の図文から便化した印象が強い。ただし四葉座はない。

その外圏に柵目文帯と鋸歯文帯の2圏がある。その様式は仿製鏡的であるが、この鏡に似た趣の鏡は、鄂城鋼五四四工地第45号墓出土の簡易鳥獸文鏡(径9.6cm)がある。



第9図 内行花文鏡(寺ノ段2号墳出土)

11. 内行花文鏡 復径17cm

福知山市天田寺ノ段2号墳<sup>11</sup>出土

長さ11.5cmほどの破片であるが、薄い

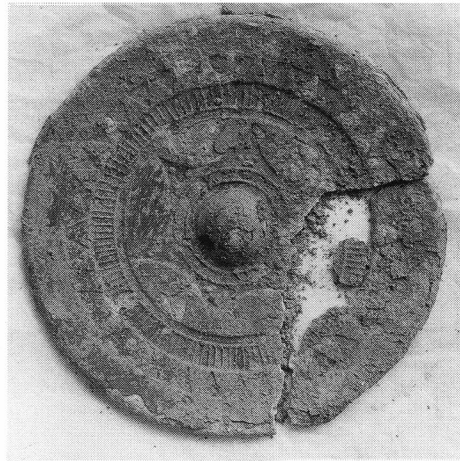
平縁と内区の櫛目文帯と雲雷文帯(いわゆる松葉文帯)がのこっているので、内行花文鏡と推定できる。

一端に小穿孔があるので、鏡片のまま垂飾として転用された可能性がある。

12. 内行六花文鏡 径10.4cm

与謝郡加悦町作山<sup>12</sup>号墳出土

鈕をめぐって二本の円圈があり、その外に主文の内行六花文帯があり、その外に櫛目文帯と鋸歯文帯をめぐらしている。作りが薄手なので、銅質も悪い。仿製である。



第10図 内行六花文鏡(作山5号墳出土)

13. 振文鏡 径9.1cm

綾部市私市円山古墳<sup>13</sup>出土

薄く、もろくて、縁部が4分の3ほど裂れていたが、主文部は残っていた。しかし図文の表出は薄く、図文が磨滅してはっきりしないが、前述の鏡と同じく五つの圈帯があり、主文の振文帯の内側に連珠帯が鈕をめぐっているようである。主文の振文は、風車の羽のようなタイプであるが、間隔が疎である。主文帯の外には、連珠文帯、櫛目文帯と、外区の鋸歯文帯があるのは前例と同じである。



第11図 振文鏡(私市円山古墳出土)

似た文様としては、岐阜県加茂郡坂祝町前山古墳出土鏡(宮内庁蔵)などがあげられる。

京都府下からは振文鏡の出土例は比較的多く、4、5例を数えるが、同種の文様はない。



第12図 振文鏡(大谷古墳出土)

14. 振文鏡 径10.4cm

中郡大宮町谷内大谷古墳<sup>14</sup>出土

斜縁で面の反りがあり、鈕は小型である。鈕をめぐる五つの圏帯があり、内から振文帯、連珠文帯、素文帯、櫛目文帯と外区の鋸歯文帯からなっている。鏡は、しっかりしている。主文の振文は獣形の腰部だけを環状にめぐらしたもので、4乳があるので乳間に2個ずつ配している。獣形の腰部には色々の表現があつて、振文のパラエティを生みだしているが、本鏡に近いタイプとしては京都市西京区大原野石見町牛廻古墳出土鏡(東博20896)がある。

(ひぐち・たかやす=(財)泉屋博古館長・当センター副理事長)

- 1 園部町教育委員会『園部町黒田・船坂工業団地予定地内遺跡群発掘調査現地説明会資料』1990
- 2 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書一寺ノ段古墳群一広峯古墳群一広峯遺跡一』福知山市文化財調査報告書第16集 福知山市教育委員会 1989
- 3 榊井豊成ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会 1990
- 4 肥後弘幸「大田南2号墳の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 5 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書一寺ノ段古墳群一広峯古墳群一広峯遺跡一』前掲
- 6 竹原一彦「ヌクモ古墳」『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 7 近藤義行ほか『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集 城陽市教育委員会 1987
- 8 肥後弘幸『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 9 木村泰彦「左京第176次(7 ANLZS地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度 1989。写真を提供いただいた長岡京市教育委員会中尾秀正氏に感謝する。
- 10 伊賀高弘「京都府木津町瓦谷古墳の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 11 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書一寺ノ段古墳群一広峯古墳群一広峯遺跡一』前掲
- 12 加悦町教育委員会『史跡作山古墳発掘調査現地説明会資料』1989。写真撮影に御配慮いただいた加悦町教育委員会佐藤晃一氏に感謝する。
- 13 鍋田勇ほか「私市円山古墳」『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 14 奥村清一郎ほか『大谷古墳』大宮町文化財調査報告第4集 大宮町教育委員会 1987